
ミラージュ

柳 航生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミラージュ

【Nコード】

N5386Q

【作者名】

柳 航生

【あらすじ】

「たとえ死んでも君を追いかける」

非凡な中学3年生の溺愛と友情、そして夢の物語。
変人呼ばわりされる15才の不思議でバカらしい、小さなお話。

< 出会い >

< 出会い >

人恋しい季節だった。それが春だったか冬だったかわからない。中学3年になったことを確信して春だとわかった。

僕は平凡だ。でもそれは自分の中だけで周りからは変人呼ばわりされている。周りの人間が低レベルなのだ。廊下の窓から空を仰ぐだけで後ろ指を指されるなんてウンザリだ。

「流行なんて消えてしまえ」

クラスの誰かがくだらないバラエティー番組の話をする決まってると思う。でも正義感はとても強い。「貧困意識」と称して給食で出る白米の一粒、ゴマの一粒まで残さないのは僕だけだ。無論、その行動も変人の要素として捉えられてしまう。

「空を飛びたい」これが僕の長年の夢だ。そんなロマンを輝かすけど、つまりそれは「近づきたい」気持ちを周囲に芽生えさせるだけで、結局僕は独りぼっちだ。

そんなある日、僕の全てが変わるような出来事が起きた。学校で席替えをすることになった。嫌いな人て隣にならないかというよりも、自分と隣になった人が自分を嫌がるのではないかという心配の方が大きかった。

だがこの予想は覆った。いや、覆ったのは僕の「女性に対する考え」だ。

隣に座ったコが優美でしなやかで、何より可愛かったのだ。華奢な体つきや長細い指を見れば、何となく贅沢ではなさそうだと、僕はおかしな見解をした。

僕は彼女に穴が開くくらい見つめてしまった。「よろしくね」
声も綺麗だ。僕は何気なくうなずいてみせた。

「お前、空飛びたいんだろ？」

クラス一の人気者が話しかけてきた。

「オレ、知ってるぜ。2年のとき、みんなに引かれたんだって？」

僕はその場を去ろうとした。

「だから嫌いだ」と心の中でつぶやきながら。

「待てよ！」

人気者は僕の腕を掴んでまでせき止めた。

「オレも！ オレもだって！ オレにもちゃんと夢があるんだ」

「え？」

思わず返事をしてしまう。

「だから、オレも夢を追う人間だってこと！」

この言葉には驚いた。今までそんなこと言われたことがなかった。

「どんな夢？」

「プロサッカー選手だ。オレは絶対なる！……夢を語り合うつ

て、その、良いことだと思わないか？」

「……うん」

「実はオレはそういう友達がない。自分が恥ずかしくなるくらい低レベルなヤツらなんだよ……」

「僕もそう思うよ」

コイツに対する見方が変わった。低レベルなヤツらに囲まれてチャホヤされるようなやつなんて、もっと低レベルだと思ってた。

「じゃあつまりオレたちは同類だ！ な！」

長らく感じなかった言葉だ。

「そうかもね」

そっけなく言い放ち席についたが、何となく心臓の鼓動は高鳴り、内心は嬉しかった。

<音楽室にて>第1部

<音楽室にて>

「私、合唱部なんだ！」

隣のコが授業中話しかけてきた。

「歌、上手なんだ」

「でも楽しくないの。私はもっと自由に歌いたいんだけどさ……」

「聴いてみたいな」

「え？」

「いや、その、自由な君の歌を」

「本当!？」

自分でも何を言っているのかわからなかった。今時異性に対して歌を歌う?告白の際に「君のために歌を作った」と言っても喜ばない人が多いはず。有り得ないような展開だよな。

「じゃ、良いこと教えてあげる」

ここで先生が私語を注意したので間があいた。

「あのね、3階の美術室の廊下からね、良い匂いがしてくるんだって。放課後にでも言ってみてよ」

何のことかさっぱりわかっていない僕の顔を見て、彼女は嬉しそうに笑った。その笑顔もまた僕を虜にさせた。

（おかげで2度目の注意を受け、僕はその場に起立しなければならなかった）

*

<音楽室にて>第2部

ガララ。

教室のドアを開け僕はまっすぐ、駆け足に3階へ向かった。美術室前まできたところで、僕の足取りは急激に遅くなった。壁にかかった絵画たちが嘲笑するように僕を見ている気がした。でも相変わらずゆっくりと歩いた。何か見落としていないかと考えながら。

そして角を曲がったところで、良い匂いが『聴こえてきた』

それは、音楽室から流れてきたピアノの音だった。

ガララ。

彼女としばらく目を合わせた後で僕が口を開いた。演奏は気づかないうちに終わっていた。

「良い匂いに誘われてきたよ」

彼女はあの笑顔をしてみせた。そして

「よくわかったね」とだけ言った。

『よくわかったね』？そりゃ誰だって気がつくよ。それにしても僕が来るまで演奏を続け、ただ待っていたのだろうか？こんなことを考えていたがそれもどうでもよくなった。

「…聴かせてくれる？ 君の歌声」

「ちよつと恥ずかしいの…でも最後まで聴いてよね」

それからの彼女は別人のようだった。透き通る歌声はどこか遠い国へのいざないにさえ聴こえたし、照れ気味仕草はとても可愛らしかった。

演奏が終わり、僕は拍手をし続けた。多分こういう感動・刺激、それに幸せに敏感じゃなかったせいだろう。

「普通さ、最近の女子っていったらこういうことできないと思うよ」

僕は言った。そして

「キモいとか異常とか言ってるさ」と、続けた。

「でも私は恥ずかしいと思ってない。そういう女にはなりたくないの」

「それで良いと思う。その、何ていうか、ちょっと変わった方が面白い……じゃないけどさ」

「ううん。きっとそう。そういうのが好きだったりするの。でもね、そのために歌ってるんじゃないんだよ？」

このコは気丈な人だ。僕はそう思った。オマケに僕と似てる。それがなぜか無性に嬉しかったんだ。

それから先も、部活が始まる1週間前までは毎日会っていた。僕はいつのまにか彼女が歌う歌も覚えてしまったので、学校という退屈な中にも楽しみができた。

だが、いつものように帰りの会が終わって揚々と音楽室へ向かった僕に、悲劇が訪れた。「私ね、本当のこと」と

彼女は一度僕を見て様子をうかがってから

「転校するの」と言った。

まず最初に僕を襲ったのは激しい衝撃で、聞き直したいと思った。待てよ？これはお決まりのパターンじゃないか？なんてありふれたつまらない筋書きだろう、とも思った。

「あのね、数ヶ月後……だからまだ先のことだけど」

僕は開いている窓際に立って

「ねえ？空飛びたいと思わない？」と言った。

彼女は驚いた様子だったがやがて

「うん、すごく」と言った。

「僕、実は火曜日が一番嫌いな日なんだよね。だからさ、毎週火曜日会ってくれないかな？」

「でも、その、部活が始まっちゃうよ」

「じゃあ、良いところ知ってるからそこにしよう！」

「…どこ？」

「3階のもつと上にあつて、古ぼけたピアノだけが置いてあるんだ。多分、倉庫かなんか」

「どうして知っているの？」

僕は肩をすくめた。

「そういうことばっかりやってるからさ」

<お別れ>第1部

次の日、昨日のことをなぜ流したのかと聞かれると思ったがそれはなかった。いつもより会話の少ない授業となったが。

人気者のアイツはみんなの中心にいる。僕がいつものように窓際に身を寄せていると、抜け出したアイツが向かってきた。

「よう！ 空飛び人！」

「何だよ それ？」

アイツは僕の顔をじつと覗きこんだ。

「この前はちゃんと聞いてたのか？ お前ときたら、表情がない」

「ひよ、表情？」

「そうだよ。サッカーだって失点すればヤな顔になるし逆に点とれば良い顔になる。それと同じだろ？ 表情を出せよ」

「まあね」

意外と面白いことを言うやつだな。

「ま、でもな」

アイツはここで間をあけた。

「オレはな、お前の夢みたいな夢に心動かされちまってんだよ。オレの夢よりもずっとバカげてる。ーそんなヤツがいてくれてー」

「おい？ 何話してんだよ？」

クラスのヤツらが集まってきた。

「相手にすんなよそんなやつ。 お前も変わり者になるぞ？」

アイツは片方だけ口元を吊り上げて

「ぜひそうになりたいね」

と言った。

と同時にチャイムが鳴り、僕たちは席に戻った。

続きを聞きたかった。春の匂いを帯びた風たちが教室に舞い込む。

その風に流されるかのように、心残りがした。なぜか、もう二度と聞けないような気がしてならなかった。他人が見ればきっと「クサイセリフ」も今は欲しかった。

そんなことを考えすぎてまた席を立たされたのは、もうどうでも良いよ。

<お別れ>第2部

それから先は何もかも順調だった。アイツとの関係、あのコとの関係…。

「でね、その場所、近くに綺麗な海があるんだ」

「海は行ったことないんだ。素敵だね。行けたら行くよ。楽しみだ」

「うんありがとう。絶対来てね。必ずだよ？」

そのときなぜか僕は絶対に行かなくてはならないと、まるで強制されているかのような感覚を覚えた。

「…急にどうしたの？」

「ううん。何でもない…。海ならカモメがいるよ！ほら、いつか私が歌ったカモメの歌があるでしょ？」

「覚えてる。うん。カモメに乗って空を飛ぶ旅人の歌だろ？」

「そうそれ！そんなこと、できたら良いのにね」

「らしくないこと言うなよ。まるでできないみたいじゃないか」

「ウフフ…キミらしいよ」

「でも、寂しいな。君がいなくなったらオレはまた楽しくない生活に逆戻りだ。アイツがいるだけ良いけど」

「でもまた会えるよ…：ねえ、一つだけ約束して？私たちはきつとまた会える。でもキミは多分私の居場所を知らないでいると思うの」

「それ、どういう意味かな？」

「私から手紙を出すわ。一週間経っても来なかったらキミから出して」

「あーでも、多分住所もわからないだろうし…」

「いいの。キミは自分の家のポストに出してくれれば」

自分の家のポストだって？なかなか面白いことを言う。

「変だよ。それじゃ届かない」

「届くよ。いいから信じて」

彼女のつぶらな瞳からは伝わるものがあつた。

『一週間経つても来なかったら？そんなことはないだろう。そう思ったから、僕は首を縦に振った。』でもさ、住所はわからなくても少なくともどの県かくらいは転校の際に聞くよ」

「あー、そのことなんだけど」

「どうかした？」

「ピツタリ二週間後には学校にも行かないで転校しちゃうから、その、学校休んで見送ってくれないかな？」

「そういうことか。もちろん！ 時間は？場所は？」

僕は時間と場所を聞いた後で、急に切なさがかみ上げてきて

「そのときでもうしばらく会えないんだね」と言った。

「大丈夫よ。きつとすぐ会えるよ。あなた次第！」

「ば、僕次第？？」

意味がわからなかった。そのときは。

「それ、どういうこと？」

「何でもない！！」

あつという間に二週間がすぎて、僕は指定された時間に指定された場所にいた。そしてついに君を送った。儚げな陽の光に照らされて、本当に儚い気持ちになった。

その日は学校に行かず、ぼんやりしていた。転校先も結局は聞かず、手紙が来たときのお楽しみとした。

それが来るはずもないことは、頭の片隅にもなかった。

<ミラージュ>第1部

それから五日間は何事もなかった。速く手紙が来ないかと、愚かなことばかり考えていた。

事は六日目に起きた。アイツとの会話で、全てが変わった。

「どうしたかな…」

「何が？」

「そりゃあ、あのコのことに関わってるだろ。お前が一番気にしてるハズだろ？」

「まあ、でもすぐ会えるよ。次の土日か、その次の…」

僕は肩をすくめて言った。そして一瞬間があいた。――気がした。

「本気で言ってるのか？」

「もし本気なら気軽にいいな！ え！ オイ！ そんなヤツだったとは思わなかったぜ！！」

「何のことだよ？」

アイツは癖である、右手で髪の毛をクシャクシャにいじる仕草をして

「そうか、そういうことだったのか。おかしいと思ったんだ。間違いない…。お前が平然としていられるハズがない。何で気づかなかったんだ…！」と、言った。

「し、しっかり話してくれよ」

速かった。アイツが食いついてきたのは。

「いいか！？あのコは今、病院だ！ 重い病気で正直危ないんだ！」

体中が凍りついた。そして目の前のコイツが憎たらしく思えた。

「あのコは生まれつき重い病気を患ってたんだ。今まで病院に居なかったことが…いや、今まで生きていたことが奇蹟なんだ。…オレはもう、治っていたのかと思ってた」

「何で…僕には…？」

「決まってる。お前を悲しませたりしたくなかったんだよ。オレ

は、お前ならもうとっくに知ってんのかと…」

「いつ聞いた？」

僕は尋ねた。

「いつ……確か、お前が休んだ日だ。そう、あのコが入院した日だ」

ショックだった。あの日、彼女は僕に「休んで見送ってほしい」と言った。その頃、学校では本当のことが知らされていたということだ。それを僕は、いつ手紙が来るかなんてことを考えていたのか……！！

まもなくしてアイツが口を開いた。

「オレ以外のヤツだったら、わざわざお前に真相を告げやしない。あのコはそう考えたんだな」そう。つまり彼女は友人の少ない僕には、自分の入院のことを誰も伝えないだろうとふんだのだった。告げるとしたら義務として先生、そしてアイツの二人だけ……。そうとわかるともういてもたつてもいられなくなった。気がついたら外を猛スピードで走っていた。ただただ走った。河原の道突き進み、銀杏並木を通り越したときにはもう自分がどこにいるのかさえわからなかった。

*

<ミラージュ>第2部

何とか家には帰り着いたようだ。でも学校には行かず、昨日通った河原の道のそばに腰掛けていた。冬でもないのに風は冷たく感じられた。芝生に寝転がり、あのコに教わった歌を口ずさみそれから起き上がった。

「もう君はいない」

そう思うと全身の力が抜けた。

イギリス風の街灯が立ち並ぶ商店街へ出た。陽ももう沈みかけ、夕暮れが金色に輝いている。ふと、電柱に貼られた写真と文字が目に入った。

《この犬さがしています！！》

幼い子犬が儚げな目つきで僕を睨む。それがなぜか無性に君と重なるような気がした。古ぼけた貼り紙を見れば、もうそれが相当昔の物だと気づくだろう。

そこで僕はそれを勢いよく引きちぎり、内ポケットにおさめた。

薄く三日月が姿を現した。だが街の灯りで霞みがちだ。もう、夏も終わる頃。

爛々たる街の片隅にいた僕に近づいてきたのは、一匹の猫だった。僕は数分だけその猫と戯れて、お別れをした。猫は諦めずについてくる。その姿はまさに僕を見ているようだった。

河原の道にあるバス停からバスに乗った。ガタゴト道を構わず走り抜けていく。途中、何人かがバスに乗った。僕は急に降りたくなつて、降りるハズだった場所のかなり前で降りた。

まっすぐ歩き、神社に着いた。鳥居に腰をもたれ、目を瞑った。遠くから君の声がする。僕を呼んでいる。そして使命を思い出した。

「手紙を書こう」

*

<ミラージュ>第3部

次の日、僕はいつも履いている靴ではない靴を履いて、君を追いかけた。

途方もなく歩いて、行き着いた先は幻のような森だった。鳥好きの僕でさえ知らないような鳥たちがさえずり、木の葉からは雨も降っていないのに雫がこぼれ落ちている。森はざわついていた。

僕はゆっくりと歩を進めた。密林の狩人のように緊迫しつつ、うつすらと浮かぶ霧に身を任せながら。

ふと、葉と葉のざわめきが聞こえた。それはだんだんと近づいてくる。僕はどんどん大きくなる足音に恐怖し、奥へ奥へと進んでいった。

蛇のような根っこに絡まりながら、巨木の前まできた。木の周りには円形に縁取られたスペースがある。足音は消えていた。――そう、消えていた。顔を見上げて見たのは微笑を浮かべて立っている獣だった。

獣と言つてもしつかりと二足歩行で、傘まで持っていた。傘からは水滴が滴り落ちている。若干太った体格で、なんの動物かはわからなかった。ただどこか鋭いようないたずらな目は、僕を見下ろして語りかけているようだ。

「僕よりも先に…？」

獣は僕のこの質問には答えずに

「ついてきてごらん」とだけ言った。僕は言われるままに巨木の前へと進み、「あっ」と声をあげた。

目の前に広がるのは美しい湖で、深緑の木々たちのざわめきと朝の心地良い風が混ざり合ったような雰囲気包まれた。

湖の中心には古ぼけたボートがプカプカと浮かんでいて、おかしいほど青い鳥たちが羽を休めていた。

「君は誰？」

僕が尋ねた。

「私はただの案内役です。あなたのような方をお連れするのです」
その言葉が終わったと同時に、急にざわめきが止んだ。（遠くでひぐらしがいないという以外のこと以外は）

「あのボートは何？」

「あれは飾りです。気にすることはありません」

僕はどうしてもこの森の住民すべての目が、自分たちに向けられていると思わずにはいられなかった。

「彼女に会わせてあげます」

沈黙……。

「先に着いたら……驚かしてあげよう」

僕は目をつむり深呼吸した。

「ありが……」

振り返ったらもうそこにあのニヤけた獣の姿はなかった。

僕は視線をゆっくりとボートに向けた。

森はまた落ち着きを取り戻したかのようにざわめき始めた。

<手紙>第1部

二週間が過ぎた。アイツは元気がない様子だ。僕は「行方不明者」らしい。警察が捜査している。病弱な母は泣いている。あのコは…僕の隣にいる。

《二週間前》

「カモメが見あたらないな」

「ごめんなさい、私…」

「別に、その、なんていうか、言ってくれても良かったのにさ」

「それであなただけを苦しめたくなかったの」

「苦しくないよ。苦しかったら会いに来てる。だから今、苦しくない」

「本当に来ると思ってたの…少なくとも、こんなに速くは」

「どうかな？手紙をわざわざ自分の家のポストに出させたのは、暗示的なところがあるけど？」

「それは…あなたのお母さんが納得するように…」

「それだけじゃ納得しないよ」

「えっ…」

「だからちよっと細工してきた」

「どんな？」

「も少ししたらわかるよ」

「そう…」

「…でもよくやるよな！君が入院したと先生がクラスに伝えたとき、僕を休ませたなんて」

「…でも結局知ってしまったじゃない」

「五日も経ってね。アイツが教えてくれたんだ。アイツは、僕ならもつとつくに知ってるかと思っただけ。これも計算の内？」

「まあ…でもこんなに上手くいくとは思ってなかったんだよ本当

は」

「そうだね。必要なかった…」

「…」

「君に会いに来た」

—————

二人だけの世界は楽しい。空も飛べる。君の歌も聴ける。
あとは現世の母とアイツにどう納得してもらうか。

「多分もう少しだよ」

彼女が言う。

「何が？」

「キミのお母さんがあの手紙を見るの」彼女は続けた

「あと発見されるのも」

「僕の遺体をかい？」

「変な気分じゃない？」

「最高の気分さ」

「でも、まあアイツには悪かったよな…」

「わかってくれると思う。夢が叶ったって、言ってくれると思う」

その二日後、僕の遺体が発見された。アイツが泣いている。

「空…飛んでるんだろ？なあ？今だつてすぐ上から見下ろしてるんだろ？…ズルいじゃないかよ…二人で会つて…オレはお前を失えば楽しい夢も見られなくなるよ…本当にこれで良かったのか？」

不意に熱いものがこみ上げてくるのを感じた。

「ありがとう」

心の中でそう呟いた。

「オレの側にいてくれ…必ず夢を叶えるから…そこに座って、見ててくれよ…」

*

<手紙>第2部

次の日は母を見ていた。

赤いバイクが家へと入っていく。母は駆け出してそれを取りに行き、固まった。母の手にあったのは僕が自分のポストに入れたあの手紙だった。どうやら、郵便物を取りに行ったついでに見つけたようだ。

《拝啓

届いているかわからない君へ。

言われた通りに自分の家のポストに入れたよ。そしてやっと意味がわかってきたんだ。

あまり書くことはないな。もうすぐ話せるから。その分アイツに書くことにしたんだ。

じゃあまた後で。

敬具

読み終えた母は驚いた様子で涙していた。その様子からはとうてい納得はしていないだろう。

すると母はもう一つの方のポストへ近づき、（僕の家にはポストが二つある）白い紙を取り出した。そう、アイツに書いた手紙だ。

《夢追う同類へ

君と会えたことは素敵だった。夢よりもずっと。君がいたから夢を叶えられたんだと思う。

僕という存在を認めてくれた君がいなかったら、僕が消えても証として残らないから。

変人呼ばわりされた僕を見てくれてありがとう。今度は僕が君を、君の夢を見る番だ。

僕が消えても僕の夢は叶う。でも君はそういう訳にはいかないだろう

う。

僕はただ逃げて、現実を避けて理想を手に入れただけ。だから君には負けてほしくない。

…もう直には話せないな。

大丈夫。

僕がいつでも君を見てる。

夢追った同類より》

母は数日後、アイツにこの手紙を届けていた。そこまでは上からみていたけど、それからは知らない。

多分きつと、わかってくれただろう。

これで僕の話は終わりです。現実から逃れ、理想を追い求め、君を追った。僕が体験した、この上なく不思議でバカらしい恋の物語は、これでおしまいです。

<それから>

母は弱りきった体をゆっくりと動かし、こたつのある座布団へ座った。

秋も終わりに近く、風の音がすりガラスを軋ませていた。母は見えにくい目で読書を始めたが、五分ほど経ったところで聞き覚えのある声を聞いた。

「ただいま!!」

母は重い体を動かして玄関へ向かった。

玄関を見るとドアが大きく開け放たれている。秋風が、排水口へ流される水のように吹き付けてくる。

そこで母は風のいたずら、つまり今のは幻聴だったと認識した。そう、病気で物忘れのある母はすっかりどあを閉め忘れてしまったのだ。

母は温かい部屋へ戻ろうとした。そのとき、母の目にある物が飛び込んできた。

「あの子の…靴？」

それは玄関の片隅に几帳面に並んでいた、息子のお気に入り靴だった。息子…つまり僕が外出のときは必ず履いている靴であり、汚れも多い。

「そうかい…あんたはここにいてくれるんだね…いつでも、ここにいてくれるんだね…」

母は大粒の涙を流した。その靴は、僕が帰ってきたかのように見せつけていた。

白く紐の乱れているその靴は、外を背にした向きで並べてあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5386q/>

ミラージュ

2011年2月6日20時32分発行